

編 集 後 記

今年度の「大学教育研究フォーラム」は『大学間交流』を中心に据えて編集されている。今年度がこの制度導入の初年度に当るからであるが、この制度としての試みは立教大学にどのように迎え入れられ、どう展開していくのかに強い関心がある。と同時にいくつかの不安もある。こんな大胆な試みを我々は持ちこたえられるだろうか、みずからのアイデンティティを見失わずにきちんと社会に開かれていくことができるだろうか、と不安になるのである。そして、現実には他大学からの学生を迎え入れてみて彼らの評価に耐えうる講義や学習システムであったのだろうか。これは非常勤講師で他大学に出講することとは次元が違うものであるから、自分が所属し、カリキュラムを担っている大学そのものが大きく問われることを意味している。

もちろん、体系的なカリキュラムにそった学習形態が他大学生に保証されているわけではないにしても、様々な意味で評価がなされることは確かなことである。ならば今のうちに他大学生に聞いてみようということで取り組まれたのが『シンポジウム』である。本音を言えば我々の講義そのものについて、彼らから大丈夫これでいいです、もしくは結構いいです、さらには全くすばらしい、とって貰いたいと思っていたのだがじつに予想もしなかった意見が多く寄せられている。具体的にはその記録をお読みいただきたい。

ともかくこの歩みは始められているし、それを可能な限り良いものにしていく責任がある。笠原先生をはじめとして各大学の交換・交流制度にかかわった方たちからの記事が掲載されているので是非展望を含めて確認していただきたい。それにしても、私たちがまだこの新しい試みを評価するためのシステムを構築できていないことは現段階での最大の課題であろう。

今回の全カリ・シンポジウムがその一端を担ったとすれば、ふさわしい評価システムを構築できたときにこそ、そのように言えるであろう。つまり私たちは学生と一緒に評価の軸や方向を模索することに着手しなければならなくなっているということである。

(福山 清蔵)